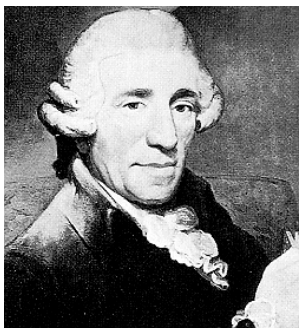

ハイドン（1732～1809）について

ハイドン（Franz Joseph Haydn）は音楽史の古典派時代における中心的人物の一人である。彼は古典派音楽の全分野に貢献したが、特に交響曲は、モルツィン伯爵家の楽長となる1749/50年頃から2度目のロンドン滞在の1795年まで一貫して作曲し、106曲を残しており、「交響曲の父」と呼ばれている。私生活では、床屋の娘マリア・アンナ・ケラーと結婚するが、子供にめぐまれず、幸せな家庭ではなかった。1761年からエステルハージ侯爵家の当主3代に仕えることになるが、副楽長時代は教会音楽以外の仕事、すなわち演奏・指揮・作曲、楽員や楽譜の管理など、楽団の一切の仕事が任され、楽長となってからはこれに教会音楽、オペラの作曲・演奏が加わった。激務とウィーンから遠いエステルハーザ宮に隔離された状態にしばしば愚痴をこぼしたが、18世紀の音楽家としてはめぐまれた境遇にあった。主人のために作曲した自作品を楽譜出版業者に売り、代金を受け取る自由を与えられることは、当時としてはおどろくべき待遇であった。その結果、ハイドン作品はエステルハーザ宮の客にとどまらず、多くの人々の耳に届くことになり、彼の名声はヨーロッパ中に広がった。1790年当主の後継により、ハイドンは侯爵家から離れ、バイオリン奏者でもある興行師ザロモンの招きで2度に渡りイギリスへ演奏旅行に訪れる。第94番「驚愕」、第100番「軍隊」、第101番「時計」など、交響曲12曲を演奏して大成功をおさめる。この旅行の際、ヘンデルのオラトリオ「メサイア」の音楽に触れて大きな感銘を受け、オラトリオ「天地創造」と「四季」を作曲した。晩年の作曲であるこの2曲は、古典派の交響様式を基礎に、独唱、合唱の声楽様式を巧みに結合し、古典派の宗教音楽の典型となった。

略歴

1732年	3月31日、ウィーン南東のローラウ村に、車大工職人の長男として生まれる
1740年	ウィーンの聖シュテファン大聖堂の少年聖歌隊に入る
1749/50年頃	変声期を迎えて聖歌隊を解雇、フリーの音楽家として苦労する
1758年	ボヘミア地方のモルツィン伯爵家の楽長に採用される
1761年	ウィーンの南50キロ、アイゼンシュタットに居城を持つハンガリー貴族エステルハージ侯爵家の副楽長に採用される
1766年	楽長ヴェルナーが他界し、ハイドンが楽長となる
1785年頃	モーツァルトと親交を持ち始める
1791年	侯爵家から離れ、イギリスで演奏旅行を行う（91～92年と94～95年の2回）
1792年	イギリスからの帰途ボンでベートーヴェンと会う
1796年	再び、エステルハージ家の楽長となる（1804年まで）
1809年	5月31日、有名かつ富裕な音楽家としてウィーンで死去

文責：どくとるA

Tokyo Hauptchor